



Skaalプロジェクト実践報告

(Skaal: Senior Knowledge Assist & Active Learning)

山内研究室 修士2年

折茂美保



目次

1. 研究の背景・目的
2. 先行研究
3. 仮説
4. Skaalプロジェクト概要
5. 評価
6. 総括



1. 研究の背景と目的

- 研究の背景

- ・家にこもりがちな高齢者の存在(古谷野ら 2000)
- ・「自分の型にはまっている」という高齢者へのネガティブなイメージ(堀 1999)

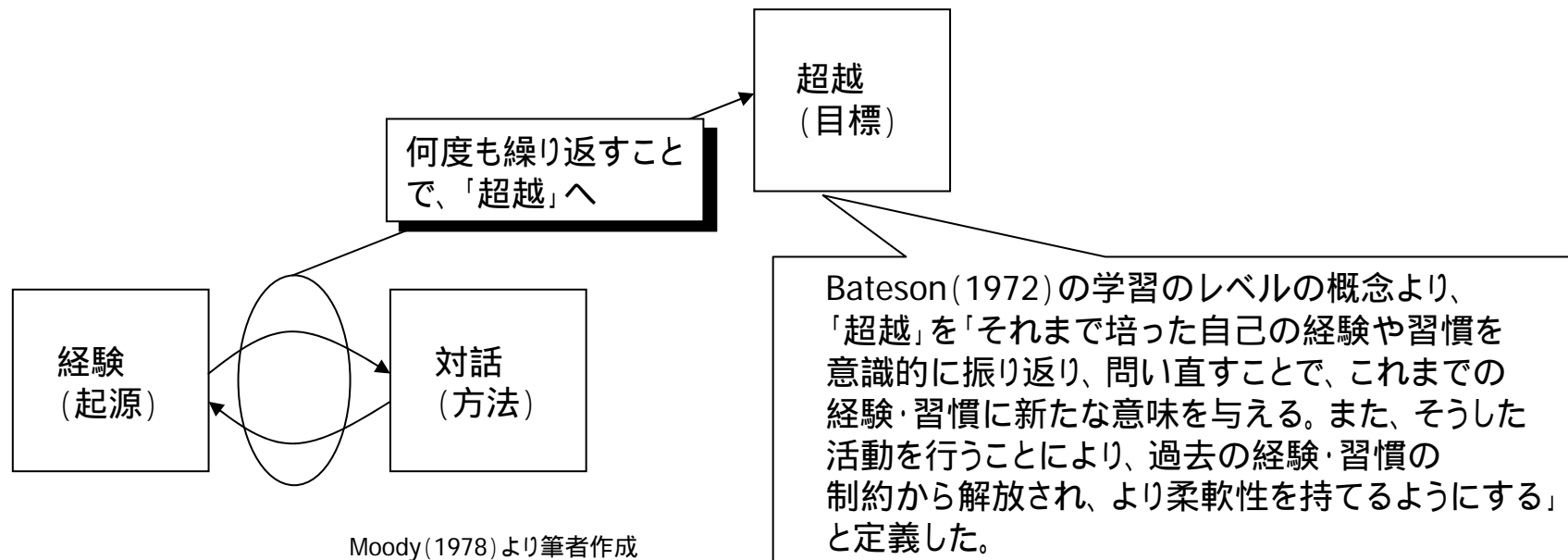
- 研究の目的

高齢者が彼らの経験や知識を活かせる学びの活動を通して、彼らの視野や活動範囲の拡大、つまり、ネガティブな部分の克服を行なっていけるような学習環境のデザインを行なう。

2-1. 先行研究：高齡期の学び

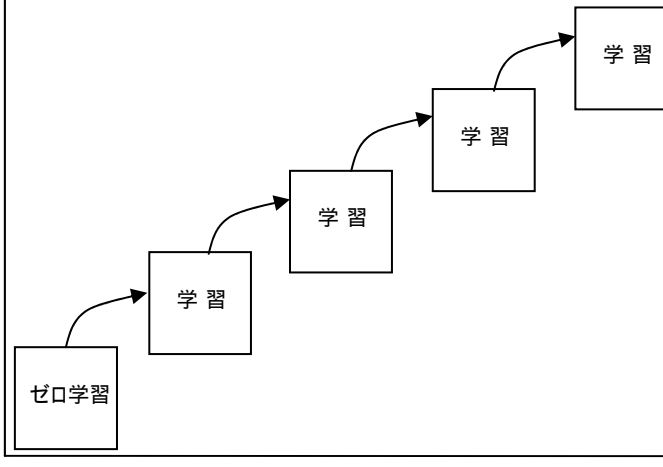
■ 高齡者教育理論

Moody(1978)は、高齡者教育は、その起源を「経験 (Experience)」に求め、その方法を「対話 (Dialogue)」に求め、目標を「超越 (Transcendence)」に求める、とした。



2-2. 先行研究：学習のレベル

学習レベル



学習のレベル	特徴
ゼロ学習	反応が一つに定まっている。その特定された反応は正しかろうと間違っていようと、動かすことができない。
学習	反応が一つに定まる定まり方の変化。初めの反応に代わる反応が、所定の選択肢群の中から選び取られる変化。
学習	学習の進行過程上の変化。選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる。その区切り方の変化。
学習	学習の進行過程上の変化。代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるような変化。
学習	学習に生じる変化となるが、地球上に生きる(成体の)有機体が、このレベルの変化にいきつくことはないと思われる。



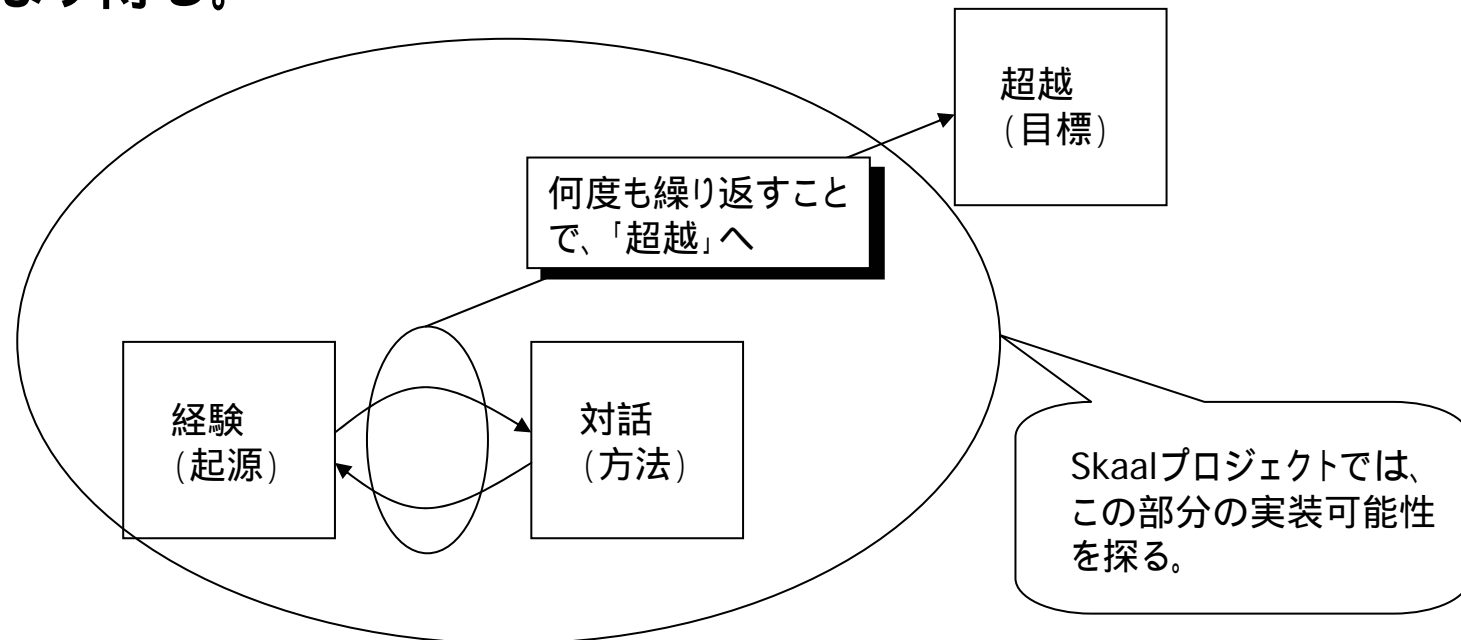
2-3. 先行研究：国際交流学習

- 国際交流学習とは
国際交流を通して学ぶ学習活動
- 国際交流学習を本研究で選択した理由
 - ・先行研究より、異文化間・国際間の教育における目標が本研究における目標と近かった。
 - ・高齢期の学びの特性を活かす「場」としての「国際交流」の可能性。

3. 仮説

- 仮説

高齢者教育理論における65歳以上の高齢者の学習目標を達成するための手法として、国際交流学習は有効となり得る。





4-1.Skaalプロジェクト概要

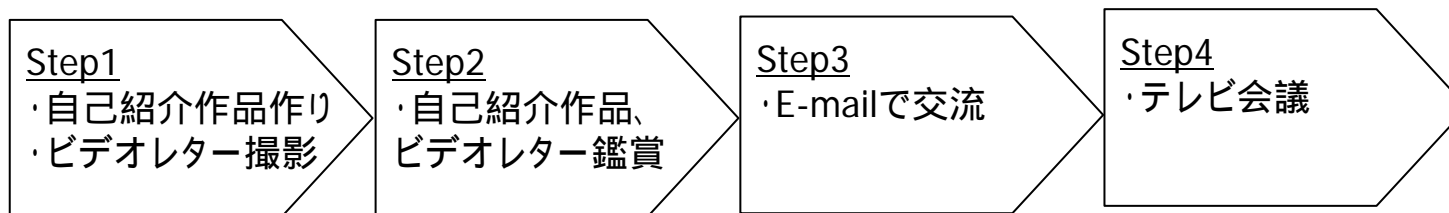
- 実施時期

2004年7月10日～2004年9月20日

- 参加者

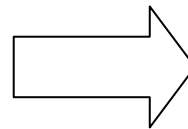
	人数	属性
日本	8名	男性5名 女性3名(うち1名は8月下旬より参加)
ノルウェー	5名	男性1名(8月下旬より参加) 女性4名(うち2名は8月下旬より参加)

- プロジェクトの流れ



4-2.Step1

- 自己紹介作品作り



- ビデオレター撮影



4-3.Step2

- 自己紹介作品、ビデオレター鑑賞



4-4.Step3

- E-mailでの交流

E-mail from Norwegian
Group members

(英文)



ファシリテーター

日本側参加者からの
E-mail

(日本語文)

4-5.Step4

- テレビ会議





5-1. 評価

- 評価の方法
 - 主に質的アプローチを採用。
 - ただし、E-mailでの交流の部分に関しては、量的データを併用。
- 対象データ
 - ・ポストインタビューデータ
 - ・テレビ会議での発言データ
 - ・E-mailでの交流のE-mail内容・数



5-2. 評価: Step1

- Step1の学習目標

「相手国の参加者に対する自己紹介用作品・ビデオレターを作ることで、自分の経験を振り返る。」

- 評価結果

経験の振り返りがあった場合と無かった場合とで分かれたが、振り返りが無かった場合でも、重要な知見が得られた。

- 課題

Step1にもう少し時間をかける必要性が明らかになった。



5-3. 評価: Step2

- Step2の学習目標

「相手国の参加者が制作した自己紹介作品とビデオレターを観ることで、これから交流する相手の輪郭を捉える。」

- 評価結果

学習目標が達成できたことを示す参加者の発言が殆どを占めた。しかし、作品とビデオレターに対する評価は分かれた。

- 課題

プロジェクトの運用日程やStep2の進め方に関する課題。



5-4. 評価: Step3

- Step3の学習目標

「E-mailによる交流を通して、お互いのことをより深く知る。それに伴い、自分の全く知らない世界があることや、そこで行なわれている活動と、自分の活動との共通点、相違点を知っていく中で、新たな関心事や目標を持つきっかけ作りをする。

- 評価結果

交流が進むにつれ、E-mail数や話題の広がりが見られた。また、学習目標の達成を示す発言が見られた。

- 課題

ファシリテーションの在り方



5-5. 評価: Step4

- Step4の学習目標

「テレビ会議を行なうことで、『同じ時間、空間を共有した』という連帯感・親近感を生み出すこと。また、E-mailでの交流ではつかめない、表情や声などがテレビ会議では分かることにより、新たな学び、発見をすることができる。」

- 評価結果

学習目標の達成を裏付ける発言が多く見られた。また、E-mailとテレビ会議との間に相補関係が見られた。

- 課題

話題のすれ違いを活かすためのファシリテーションや交流のデザイン。



5-6. 評価：プロジェクト全体

- プロジェクト全体の学習目標

「Skaalプロジェクトに参加することにより、これまでの自分の経験を捉え直したり、自分と異なる経験をしてきた人の話を聞いたりすることにより、視野・活動範囲の拡大、新たなことへの興味・関心の生起が見られるようになる。」

- 評価結果

4種類の学びや活動が見られた。

(「これまでの考え方の捉え直し」、「興味・関心の拡大」、「活動目標の設定」、「学習活動の発生」)

- 課題

葛藤状況の作り出し方。



6-1. 総括：結論

- 参加者に見られた活動と学びの分類

分類	参加者
.これまでの考え方の捉え直し	JB, JE, JF, JH, NI
.興味・関心の拡大	JD, JF, JH, NI, NJ, NK, NM
.活動目標の設定	JA, JB, JC, JE, JG, JH, NI, NL
.学習活動の発生	JA, JB, JD, NK

- 結論

本研究において、高齢者の学びの在り方の一つのモデルとして有効な学習環境をデザインすることができたことで、研究の目的を達成することができた。



6-2. 総括：課題と今後の展望

- 課題

- ファシリテーションに関する課題

- コミュニケーションに関する課題

- ・自己紹介作品とビデオレターの有用性

- ・E-mailとテレビ会議の相補関係の意識的な活用

- 今後の展望